

1 学校教育目標 たくましく かしくく ともに生きる子供の育成	2 本年度の重点目標 ①自ら安心・安全で健康な生活を送ろうという意識をもたせる。 ②自ら進んで取り組む学習習慣を身につけさせる。 ③思いやりと助け合いの心を持たせる。
---	---

達成度	A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
-----	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	・自らの生活をよりよいものに改善しようとする態度の育成	・自らの夢や目標の実現を目指すためにも、自己肯定感、自己有用感を高める。 ・自分の良さや自分のがんばりを認め、「自分が好き」と応える児童を85パーセント以上にする。	・年間を通して、児童一人一人の良さに目を向け、全校放送で紹介する「ほめほめ活動」を実施し、全児童220名それぞれの良さを年間3回以上紹介する。 ・学年において、児童が互いの良さを認める活動を日々実施する。	A	・年間を通して「ほめほめ活動」を行い、全児童221名のそれぞれの良さを年間5回以上紹介することができた。 ・学年においても帰りの会等で互いの良さを認める活動を年間通じて継続して行うことができた。	・児童の自己肯定感、自己有用感を高めるために、ほめほめ活動はさらに継続していく。また、学年や学年の枠を超えて互いを認め合えるようにしていく。

①「たくましく」…自ら進んで自分の生活を向上させようとする意識を持たせる。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・自らが健康であるために生活習慣を見直す意識の育成 ・安心・安全を意識した生活習慣の育成	・朝食摂取率を95%以上に保つと共に、主食、副菜を意識した朝食内容の改善を図る。 ・業間休みや昼休みに運動場に出て運動することの習慣化を図る。(90%以上) ・健康のために睡眠時間の確保について習慣化する。「10時前には寝る」と答える児童を90%以上とする。 ・自転車に乗る際のヘルメット着用を義務づける。(着用率95%以上)	・学期に1回朝食調査を行う。 ・「保健だより」「学校通信」「学級通信」を通して朝食の重要性を訴え、学級懇談等で話し合う機会を持つ。 ・学年ごとに「みんなで遊ぶ日」を設定する。 ・情報モラル研修会を児童・保護者とともに開催する。 ・SNS、ゲーム、TV等の利用(視聴)時間について学級指導を行う。また、学級懇談会での話題に取り上げ、児童・保護者への啓発の徹底を図る。 ・PTAと連携し、ヘルメットの購入を保護者に促す。交通安全教室などを通して児童に着用意識を身につけさせる。	A	・学期に1回の朝食調査の実施や、学級や保健室からの通信により、朝食の大切さを意識づけることができた。 ・みんなで遊ぶ日ほどのクラスも設定できていた。しかしながら、遊ぶ日全部を全員参加にすることは難しく、外遊びの習慣化には完全にはなっていない。 ・情報モラルについて高学年児童と保護者で受講する研修会を企画した。児童については、インフルエンザの流行を抑えるために参加を見送り、保護者のみの受講とした。 ・インターネットやテレビなどのまわりを家庭で話し合えるように、長期休業前にプリントを配布した。それを基に学活の時間や学級懇談会で児童・保護者に説明し、啓発を行った。 ・SNSやネットゲームの危険性と家庭での指導の在り方について啓発を図るために、危険性や弊害を説明するチェックシートを作成・配布した。さらに、残虐性のあるゲームについて、ゲームの内容や児童の使用状況、弊害や危険性を資料にまとめ、全職員間で共通理解した。また、保護者向けのプリントを作成し、配布するとともに、各担任で児童に説明し、指導した。学級懇談会などのテーマにも取り上げ、情報提供や注意喚起、家庭での取り組みについての啓発を図った。 ・ヘルメット所有率は99.5%、「ヘルメットをいつもかぶっている」と答えた児童は96.6%であった。1学期と比べると改善した。100%へ向けて、児童への啓発方法を検討していきたい。 ・10時前の就寝率は、66%であった。目標には届かなかったが昨年度は61%でわずかではあるが改善した。	・情報モラルやネットゲーム等に関する研修会を年度の早い時期に計画し、児童が受講できるようにする。 ・SNSやネットゲームには危険性をほらむものが多く、変化も激しい。そのことを認識し、職員全体で情報収集に努め、研修や連絡会を通じて共通理解を図る。それをもとに、児童や保護者への啓発の充実・徹底を図る。 ・児童のヘルメット着用への意識を高めるために継続して調査を行い、児童への指導徹底を図る。 ・学校便り等でヘルメット使用率について保護者に現状を伝えるとともに、啓発を図る。 ・就寝時刻がメディア利用や習い事等と関係があることから生活時間の使い方や就寝時刻の設定について検討と啓発を図る。

②「かしくく」…自ら進んで学習する意欲を持たせ、基礎学力の定着と判断力・表現力の育成を図る。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	・自主自立的な学習習慣の育成 ・基礎学力の定着 ・判断力・表現力の育成	・授業の終末に自らの学習を振り返らせることで、自己評価力を育成する。 ・家庭と連携をとり、家庭学習の充実を図り、土日も自主的に学習する習慣を付ける。(土日の未学習率を10%以下とする。) ・標準テストの知識理解領域の正答率を全国平均にする。 ・自分の考えを書く、伝えることを習慣化するとともに、読書奨励活動の力を付ける。 ・「他者との交流活動が好き」と応える児童の割合を90%とする。	・全校で学習過程を統一する。(算数科学習) ・算数科におけるノートのとり方を全校で統一する。 ・全教科の終末に本時の「振り返り」を学習過程に位置づける。 ・学期に一度、家庭生活を振り返る週間を設定し、家庭学習時間、就寝時間、SNS、ゲームの時間を振り返らせ、児童の意識改善と保護者への啓発を行う。 ・各教科ごとの語彙を教師が意識して指導するとともに、習得した語彙を使うようにさせる。 ・「しるたタイム」前に自分の考えをノートに書かせ、その後の自分の考えの変容についても記載させる。(学年の発達段階に応じた方法で実施) ・全ての教科の学習過程に「しるたタイム」を設定し、互いに対話することが自らの学びにつながることを全児童に理解させる。	B	・算数科では全学年で学習過程を統一し、板書やノートの取り方も同じ流れで取り組んだ。 ・算数科では本時の終末に「振り返り」を位置づけて取り組んだが、他の教科では道徳や理科、図工等において取り組むことができた。全教科で取り組むことはできなかった。 ・家庭学習ががんばる週間を設け、「ぐんぐんカード」で自己評価を行った。宿題の取り組みは90%以上、土日の学習も作文等に取り組むことで習慣化してきた。読書の割合が昨年度より低くなっていた。 ・見通しをもたせ方を工夫することで「しるたタイム」に自分の考えをもつて参加できるようにした。また、友達との相違点を見つけたら、自分の考えを直したりする児童も見られた。 ・「しるたタイム」という名称では活動ができていない、少人数や学年全体で学び合う活動はどの教科でもできていたと思う。なぜ学び合うことが大切かを児童に知らせることは、学びに向かう姿勢をつくるのに大切である。	・全教科で「振り返り」を位置づけるには、職員の共通理解が必要であり、どの教科にも使えるような振り返りカード等があると取り組みやすい。 ・家庭で読書をしている児童が少ないので、金曜日に必ず本を借りて持ち帰らせたり、読書の記録を活用したりする。 ・「しるたタイム」による学び合いで新しく得たことを必ず自分のノートに朱書きするなどの共通理解が必要である。 ・友達と考えを交流させることでどんな良いことがあるかを教師が話したり、児童自身に気付かせたりする時間を設ける。
教育活動	○ユニバーサルデザイン教育の推進	・全ての児童が参加しやすい授業づくり ・支援を要する児童への理解	・全学級で板書の統一を図る。 ・支援を要する児童について担任としてどのような支援が必要なのかを具体的に理解する。(個別の支援計画・指導計画の充実)	・ユニバーサルデザイン教育の研修会を年2回開く。 ・どのような板書が視覚支援を必要としている児童にとって効果的か研修し、全学級で統一して実践する。 ・全職員が個々の特性把握に努める意識を持ち、誰もが積極的に参加できる学習方法について研修を深める。	B	・板書の書き方の基本的な枠組(日付、ページ、チョークの色等)については統一することができた。 ・夏休みに特別支援教育の研修を講師を招聘し実施した。その中でUDの視点に応じた通常学級の中で行うことができる支援についての研修を受け、意識を高めることができた。 ・支援を要する児童に関わる職員で支援会議を行い、児童支援の具体的方法について話し合いを行い、支援にあたることができた。	・来年度は4月に板書の書き方と支援が必要な児童への授業支援について提案し、全学級で統一していきたい。 ・支援を要する児童についての研修を今後も続け、理解促進を図る。

③「ともに生きる」…思いやりと助け合いの心を育てる。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・道徳教育、人権・同和教育の充実	・「自分を大切にしている」と答える児童の割合を90%以上とする。 ・家族や友達を大切にしていると答える児童の割合を90%以上とする。	・互いの良さを認め合う活動を授業中や朝の会、帰りの会に設定し、他者から認められる喜びを感じ取らせると共に、他者を認めることの大切さについても感じ取らせる。 ・家族や地域から、コメントを書いてもらうことで、自己有用感を高める。	A	・給食時間の全校放送や学級での褒め褒めタイムで紹介され、そのことで家庭でも褒められる子供達の、自尊心が高まること、他者を認め合おうとする雰囲気や学校全体で、頑張り子供やお互いに助け合おうとする子ども達が増えてきた。	・友達と仲良くできる子供達が増えてきたが、トラブルの中で相手を傷つける言動をしてしまう事案があり、意識を行動に繋げるために学級・学年・係・管理職など全職員で子供達に話をし、自分や友達を大切にできる児童を増やしていく必要がある。
教育活動	●いじめ問題への対応	・いじめの未然防止、早期発見に向けた児童自らの意識・態度の育成	・毎月心のアンケートを実施する。児童に当事者意識を持たせ、ちょっとしたことでもアンケートに記入する習慣化を図る。「学校の先生に悩みを打ち明けやすい」と答える児童の割合を90%以上とする。	・いじめにおいて傍観者は加害者であるということを道徳の授業などを通して理解の徹底を図る。 ・日記などにより、アンケート以外でも担任に悩みを相談しやすい環境を作る。 ・担任以外のものも全児童の名前を覚え、話しかけるようにすることで情報収集力を上げる。 ・教師自身が、児童の様子をしっかり観察し見逃さないために、未然防止、早期発見の研修を行う。	B	・いじめの防止や早期発見、対応の仕方について、職員間で学習会を開催し、共通理解を図った。また、いじめが起ころいずいじめの特性やそれがつくり出されるメカニズム、いじめを防止したり早期発見したりするための手立て、効果的な学級経営や指導等についてまとめた資料を作成した。それを基に、生徒指導連絡会等において職員間で共通理解を図り、各学級での指導に生かせるようにした。 ・児童の悩みや心理状態等を把握するために、記述式のアンケートを毎月実施した。気になる記述がある児童については、各担任で対応するとともに、生徒指導連絡会等で情報交換を行い、共通理解を図った上で学校全体で対応した。実施したアンケートは、全児童分を5年間保管することにした。	・いじめの防止や早期発見のための方策についてさらに焦点化を図り、教育課程の中で全職員が実践する。 ・アンケートを基に各担任や学校として指導した内容についても、アンケート等と一緒に綴ること、次年度の担任や中学校との連携に生かす。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・超勤時間の削減	・毎日19時30分には学校を施設する。 ・月45時間以下の超勤を全員が目指す。	・教頭を通して18:00に全職員に声をかけ、仕事の優先順位を確認する。 ・来年度の学習指導要領本格実施を前に、再度行事の見直し、教育課程の見直しを行い、事務処理を行う時間を確保する。 ・同僚意識を高め、個人に仕事が集中しない組織作りを行う。	B	・毎日18:00～18:30間に教頭が職員に声をかけ、ほぼ全員が19:00には施設することができるようになった。また、業務記録簿の管理を一元化しているため、校長室通信の内容を検討するとともに、教頭や指導教諭、事務職員をはじめ、職員との意見交換を日常的に行っていた。 ・今年度の反省をもとに、来年度の行事や校時表を見直したことで、職員の意識に変革が見られ、早めの体調を心がけるようになってきた。 ・職員の人数が限られているので、どうしても一人あたりの役割が多くなってしまふ。組織そのものの見直しも必要である。	○学校評価計画に基づいて、職員間で協議しながら自己評価を行えるようになり、教育活動に改善を加えようとする意識が高まってきた。また、業務記録簿の管理を一元化しているため、校長室通信の内容を検討するとともに、教頭や指導教諭、事務職員をはじめ、職員との意見交換を日常的に行っていた。 ○校務としての必須業務と、各職員の創意工夫に任されている業務を整理しなおし、役割分担、方法、時間配分などについて検討する。 ○来年度も各種校外行事の目的、実施方法等について各担当部署で再検討・改善を図っていただくように依頼したり、参加の在り方を見直したりしながら職員の負担軽減を図っていく。
学校運営	○開かれた学校づくり	・公開授業の充実 ・学校行事への保護者の参加意識の向上	・授業参観日の保護者の参観率を70%以上とする。 ・学級懇談への参加率を50%以上とする。 ・学校行事に積極的に参加したと答える保護者の割合を70%以上とする。	・週1回を目途に、学校通信を発行し、学校での児童の様子や学校での取り組みについて分かりやすく伝える。 ・行事の前にメール等による保護者の参加を呼びかける。 ・参加して良かったと思える学級懇談について教職員で検討する。	C	・授業参観については、事前にプリントやメール等を通して保護者にお知らせしているため、毎回多くの保護者に参観してもらっている。 ・学級懇談会は、低学年は参加率が高いが、中学年・高学年は参加者が少ない。PTA総会も非常に参加者が少ないので、日程等の検討が必要である。	○土曜開校を利用してPTA総会や学級懇談会を行い、保護者が参加しやすい状況をつくる。 ○学校行事の見直しを行い、日程等を検討する。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学校の取組については、保護者や学校評議員からは、高い評価を得ることができた。特に、「ほめほめ活動」については、児童の自己肯定感を高める上でたいへん効果的であった。「学力向上」に関しては、各学年の実態を詳細に把握し、基礎・基本を徹底する指導を行っていく必要がある。「心の教育」は日頃の生活指導や道徳の授業、体験活動、学校行事等と密接に関連させ、児童の変容を自覚させるようにしていきたい。さらに、「働き方改革」に係る取組では、教育活動の適正化の視点から、行事等の削減、時間縮減、実施時期の検討などを行うとともに、校務の効率化の視点から事務処理の方法の工夫改善に取り組む。

●は共通評価項目、○は独自評価項目